



「ゆいっこ」この一年、そしてこれから

～顔の見える、息の長い支援をめざして～

3月の震災以降、岩手の仲間とともに民間復興支援グループ「ゆいっこ」を立ち上げ、その「横浜支部」として、私たちがなりの支援活動を行ってまいりました。

当初はとにかく、募金活動を行ってその資金で物資の支援や炊き出しを行いました。街頭で募金をお願いすると、涙ながらにお金を託してくださる方、「必ず現地に届けてください」と言いながら募金をしてくださる方が大勢おられて、お願いする私たちまで胸が熱くなりました。

みなさんの思いは単に日本赤十字に振り込むだけでは応えることにならないと思い、直接自分たちで届けていきたいというのがこの支援活動のスタートでした。

まだ東北自動車道も開通していなかった3月23日に、初めて飛行機で岩手に入り、大槌町安渡小学校避難所に、水も電気もないなかで一泊し、十数か所の大槌町内の避難所を回りました。

支援活動を続けていきたいという私の思いの原点は、このときの避難所回りです。たくさんの方と接し、お話しし、そのなかで当たり前ですが、彼らの不安や恐怖を目の当たりにしたことは、私にとってはとても重要な体験でした。

そして、現在。局面も変わりました。横浜では、「まだ支援活動やってるの?」と言われることも一度や二度ではないという雰囲気になりました。しかし、現地はまだ復興の入口に立ったばかりです。

3月12日に大槌に行って来ました。現在進行中の「『三陸沖に瀬谷丸を!』プロジェクト」を大槌町長に説明し、全面的な協力をお願いするためです。ただ、大槌には他にも会いたい人や行きたい場所がたくさんあるので、短い時間ですが回りました。

そのなかで、「3月11日のその時間には、仮設住宅の前にみんなで並んで半鐘を聞いて黙祷して、手を合わせたんだけど、そうしたら、涙がこらえられず、みんなで泣いちゃった」という言葉を聞きました。多くの人々にとって、「あの日」がまだ「特別」なのだと感じました。体験していない私にははかり知れないほどの心持ちだと思えます。だからこそ、私にはできることがあり、一緒にやれることがあるのだと思えます。

復興に必要なのは、まず環境整備です。産業を興すこと、仕事をつくる必要があります。今は、仕事がない。先も見えない。だから若い人が外に出る。高齢者ばかりでは、生産活動ができない。売るのが作れない。この悪循環の繰り返しです。その突破口、ブレイクスルーをすることで、横浜に住む私たちが力になることができたなら、そう考えています。

基本的には、私たちは消費地に住み、毎日消費しているのですから、生産地である被災地とく生産者 - 消費者 > という形でつながれるのが一番いいと思います。そのためにも、被災地で生産活動ができる下地を作っていかなければなりません。

現地の方々ともお話しをさせていただきながら、小さくとも形の残る、見える形で、活動をし、人と人の付き合いを基本とした顔の見える支援を模索し続けていきたいと思っています。これからもどうぞよろしくをお願いします。

ゆいっこ横浜言いだしっぺ支部代表

坂井学

1. 2011年3月～2012年3月の活動報告

【2011年】

- 3月11日 設立
- 14日 募金@さかい学事務所前
- 15日 募金@さかい学事務所前、東戸塚駅
- 16日 募金@さかい学事務所前、戸塚駅東口
- 17日 募金@さかい学事務所前、東戸塚駅東口
- 18日 募金@さかい学事務所前、三ツ境駅南口
- 19日 募金@さかい学事務所前
- 20日 募金@さかい学事務所前、東戸塚駅東口
- 21日 募金@戸塚駅地下通路
- 22日 募金@戸塚駅東口、東戸塚駅東口
- 23～24日 【第1便】支援物資搬入、現地視察とヒヤリング
- 25～26日 【第2便】支援物資搬入（自転車）
- 26日 募金
- 27日 募金
- 31～4月1日【第3便】炊き出し「1000人分のカレーをつくろう!」、物資搬入
- 4月5～6日 【第4便】炊き出し「魚を贈ろう!～イワシ1000匹、アジ350匹～」
- 16～17日 【第5便】炊き出し「日本全国同時お花見 食事提供」
- 27日 第1回「ゆいっこ横浜言いだしっぺ支部活動報告会」@戸塚区地域会議室
- 5月14日 募金@横浜駅高島屋前「被災者のなまの声をとどけよう!」
- 15日 シンポジウム「被災者とともに考える」@泉区公会堂
募金@立場駅、いずみ中央駅
- 29日 募金@戸塚駅西口、東口
- 6月4～5日 【第6便】炊き出し「野菜いっぱいあったかい料理をつくろう!」
- 15日 募金@瀬谷駅北口
- 13～14日 【第7便】復興ヒヤリング
- 15日 募金@瀬谷駅北口
- 22日 募金@瀬谷駅北口
- 24日 募金@三ツ境駅
- 25～27日 【第8便】炊き出し「生魚を食べてもらおう!」
- 7月1～2日 【第9便】支援物資搬入（復興食堂で配布する食器類）
- 3日 「宅建西部支部サマーフェスタ2011」ゆいっこブース出店
- 3～4日 【第10便】支援物資搬入（復興食堂で配布する食器類）
- 5～7日 【第11便】支援物資搬入（ " " ）
- 7月12日 第2回「ゆいっこ横浜言いだしっぺ支部活動報告会」@戸塚区地域会議室
- 15～18日 【第12便】復興食堂ゆいっこブース出店（食器無料配布）
- 8月8日 「自民党3本の矢 夏祭り」ゆいっこブース出店
- 27日 「ケアハウスゆうあい 納涼祭」ゆいっこブース出店
- 9月24、25日 「湘南医療福祉専門学校 文化祭」ゆいっこブース出店
- 28日 「言いだしっぺ『さかい学』を育てる会」ゆいっこブース出店
- 10月22日 「ゆいっこ横浜×大槌町 意見交換会」@さかい学事務所
- 23日 「瀬谷フェスティバル」ゆいっこブース出店
- 11月30～12月1日 【第13便】炊き出し「仮設住宅で交流しよう」

【2012年】

- 1月 7日 「自民党横浜市連賀詞交歓会」ぐるっとおおつちブース販売手伝い
 2月 4日 「さかい学 賀詞交歓会 in 戸塚」ゆいっこブース出店、
 ぐるっとおおつちブース販売手伝い
 12日 「自民党泉区連合支部 賀詞交歓会」ゆいっこブース出店、
 ぐるっとおおつちブース販売手伝い
 3月 4日 「さかい学 早春のつどい in 瀬谷」ぐるっとおおつちブース販売手伝い

「ぐるっとおおつち」は、仮設住宅生活者の雇用促進をはじめとする支援を行っているNPOです。関東在住のぐるっとおおつちのメンバーからお声かけをいただき、ゆいっこでは「おおちゃん・こづちちゃん人形」の販路開拓と販売のお手伝いをしています。

2. 2011年3月～2012年3月の収支報告

<収入>

内 容	収 入
街頭募金	2,373,940
寄付金	2,021,662
グッズ等売上金	346,850
利子・その他	178

収入 総計...(A)	4,742,630
-------------	------------------

なお、車2台、スクーター1台、Tシャツ、タオル、肌着などをはじめ、多くの物品をご提供いただいたことも感謝とあわせ、ご報告申し上げます。

<支出>

被災地への直接的な支援活動	物品・食材購入費	1,785,433	1
	ガソリン代等運搬費	224,215	
	支援金	100,000	2

横浜での活動	報告会・シンポジウム経費	264,690
	ゆいっこブース経費	378,671

グッズ関連	グッズ購入費	137,550
-------	--------	---------

支出 総計...(B)	2,890,559
-------------	------------------

残 高...(A-B)	1,852,071
-------------	------------------

1... 5/14、15に大槌町の方と一緒にいった募金に関しては、大槌町の方と相談し、彼らから提案のあった栄養剤戸別配布に50万円、「三陸沖に瀬谷丸を！」のプロジェクトに50万円、協力いたしました。詳しくはゆいっこ横浜のブログをご覧ください。

2... 岩手造船所事務所設置費の一部として協力いたしました。

街頭募金や寄附でお預かりしたお金を物品・食材購入など、できるだけ被災者支援のみに用いることができるよう、ゆいっこにご協力いただいたみなさま方には多くの場合自己負担をお願いして、活動にご協力いただきました。心より感謝申し上げます。

「言いだしっぺ」の **さかい学** 的 提言

被災地の現状

岩手県大槌町では、仮設住宅内での住民の交流がほとんど行われておらず、交流の機会を提供するための炊き出しなどのイベントが求められているという話や、仕事を求める人が多く、求人倍率0.75という状況にもかかわらず、いざ工場を再開しても働く人が集まっていけないという話などを聞きます。

復興支援の重要ポイント

被災各県も復興計画なるものをまとめています。国も特区などの支援政策をアピールしていますが、中身を読んでみると、方向性はもちろん示されているものの、被災者が期待し、待っていたものとはかなりかけ離れている気がします。

ガレキ処理の問題なども被災地の大きな問題としてありますが、それ以上に深刻なのは、あまり指摘されていませんが、若い世代の流出だと私は思っています。

昨年12月の段階で、被災3県では34,000人もの人が被災地から転居しましたが、なんとその8割以上が30代以下でした。本来その地域の復興を支えるべき人たちが、内陸部や都市部へ出て行き、高齢者だけが残される現象が極めて顕著になってきています。

若い世代が求めるものは？

では、今後の地域を支える若い世代に戻ってきてもらうには何が必要か？

私は**その地域の将来の希望・ビジョンがあり、若い世代がその場所で夢を求められる可能性を示すことが大事**だと思います。若い世代はこれから何十年とその場所に住み、働き、子育てをすることを考えます。子どもや孫達がこの場所で暮らし続けていけるのか？しあわせを感じる人生を過ごすことができるのか？その展望・ビジョンがなければ、戻って来ないと思うのです。

そのためには、単なる雇用の場というのではなく、将来、それがどう発展していくのか、どのようなやりがいを感じられるのかな

ど、自分の夢が実現できるという確信を持ってもらえる復興計画を出していかなばならないと思います。

例えば大槌漁協は1月半ばに破綻をし、解散しました。震災の影響があったのはもちろんですが、以前から10億円を超える借財があり、経営的にも行き詰っていたことがわかりました。

つまり、単に今の行政が唱えるような「震災前への復興」を掲げて、次は行き詰ることなくやっていけるという展望がなければ、魅力ある仕事とはならないのではないのでしょうか。

横浜からできること

そうするために必要なことの 하나가、**都市部との連携**だと思います。被災地は、今回の震災で多くの都市部のいろいろな団体や個人と、ボランティアを通じて知り合ったでしょうから、そういう人たちに末永く応援団になってもらう取り組みをしていけば、ゆくゆくは消費者として大槌産の物品を購入していただけます。

「ゆいっこ」でも産業興しの支援になることを中心に行っていきたいと思っています。同時に被災地においても、一つでも多くの成功例が出せれば、やる気になる人も多くなるはずだと思うのです。

今、横浜市瀬谷区においては、有志が「三陸沖に瀬谷丸を」ということで活動を始めようとしています。漁業再開に向けて船を贈ることで、産業興しの支援をしたいということです。多くの方が協力してくれれば、その方々は今後は大槌町で水揚げされる魚などの購入者になってくれる可能性も大きくなります。3月25日には瀬谷小学校でフリーマーケットを企画し、多くの人に知ってもらうと同時に、その売り上げを募金に回すことにしているそうです。

ゆいっこの支援活動もこういう取り組みや現地でがんばっている人たちの応援を、人と人との交流や情報交換という形で進めていければと思っています。

